

研究結果報告書

「戦後における女の「老い」－女流作家の作品を中心に－」

本研究は近代女性作家の作品を通して今まで本格的に研究されたことのない「老い」のことを多様な視点で考察するものである。まず、本研究の第一歩として、林芙美子が戦後書いた『晩菊』（初出「別冊文芸春秋」1948年11月）を考察材料にし、敗戦と老いに焦点を当てて分析してみた。その研究結果は次の通りである。

『晩菊』の主人公であるきんは五十代の女で一人でも生きていける生活力を持っている。彼女はまだ戦中に燃え上がっていた若い田辺との愛を覚えており、あの時の情熱を再び味わいたいと思っている。しかし、戦争も終わり、田辺は「恥じらい」もなく、「自尊心」までなくした男になっていた。彼はまるで敗戦した日本の現在のように転落した姿できんの前に現れてくる。きんはそういう現実の前で自分の老いに焦りの色を見せ、若さに執着していく。何故かというそれは転落してしまった恋人と敗戦した日本の悲惨は自分の老いのように避けられない現実として認識されるからである。きんは「つまらね男」になってしまった田辺を軽蔑し、今まで大事にしていた彼の写真を燃やしてしまう。ここで「写真」とは青春の表象であり、二人の愛し合った「過去」の物証でもある。そういう思い出の写真を燃やすということは「過去」との断絶を意味し、一方では「現実」の受け入れの意志として解釈できる。きんは「この戦争ですべての人間の心の環境ががらりと変わった」と寂しく思う。つまり、当時の日本全体には敗戦による陰影が落とされており、暗い雰囲気の中で戦後が始まったのである。それで戦後日本は「人間の心の環境」はもちろん、生活全般にかけても激しい変化を迎えていくと論じた。今後は戦後活躍した他の女流作家と作品との比較も試みて日本における戦後と老いのことを精緻に分析していきたい。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

(予定)

題名 : 「戦後における女の老い－林芙美子と円地文子を中心に」
発表者名 : 崔 殷景
会議名 : 韓国日本近代学会国際学術大会
日時 : 2013. 5. 4
場所 : (韓国釜山) 東義大学校

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

題名 : 「林芙美子『晩菊』論－敗戦、そして老いの陰影－」
発表者名 : 崔 殷景
論文掲載誌 : 「韓日軍事文化研究」
掲載時期 : 2012. 10. 31
巻・号・頁 : 第14集、pp. 281~299

題名 : 「戦後における女の老い－ 林芙美子と円地文子を中心に」
発表者名 : 崔 殷景
論文掲載誌 : 「日本近代学術研究」
掲載時期 : 2013. 11. 30 (予定)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)